

春城日誌

明治三十年
六月以降

特別

14

1919

527



176792
176791

春城日誌

明治三十年六月以降

六月一日

針を傾大急りし事ありて、
 区部より余を求め、
 付家大人事あり、
 中野老の浙江事、
 之後(指右)報復士を、
 仲を招致し、
 中野を極む、
 明報余らも、
 金中事、
 在籍小車を、
 王子

六日

日曜、三井会より本紙、言葉とをよみしはりん
と約し先づ文をりと紙をなすはる中より
ふりま、おぼくは松原様と云ふお家家奴
改筆し伊白初に流流をわす、主人の
手紙と花の紙とをわすしおとあし
終末は、田子と、藤、茅、こすを投す、是を
中村氏より本紙流す、田原様本紙を
伊白の云ふは、お家家奴と云ふは、
梅原の云ふは、お家家奴と云ふは、
云ふは、お家家奴と云ふは、お家家奴と云ふは、

佐初本紙、七本紙、お行、つす、中野子流
はるは、梅原の云ふは、お家家奴と云ふは、
おし、お家家奴、お家家奴、お家家奴、
お家家奴、お家家奴、お家家奴、お家家奴、
お家家奴、お家家奴、お家家奴、お家家奴、

七日

三井会より本紙、言葉とをよみしはりん
と約し先づ文をりと紙をなすはる中より
ふりま、おぼくは松原様と云ふお家家奴
改筆し伊白初に流流をわす、主人の
手紙と花の紙とをわすしおとあし
終末は、田子と、藤、茅、こすを投す、是を
中村氏より本紙流す、田原様本紙を
伊白の云ふは、お家家奴と云ふは、
梅原の云ふは、お家家奴と云ふは、
云ふは、お家家奴と云ふは、お家家奴と云ふは、

帆足年や三井と云ふ事益々位中、之れ母人
可交し申すは、之れ之れ之れ之れ之れ之れ
書を来す取らむ言ふ事、之れ之れ之れ之れ
之れ之れ之れ之れ之れ之れ之れ之れ之れ
家余の事、之れ之れ之れ之れ之れ之れ之れ
解と法ありし事、之れ之れ之れ之れ之れ
也、之れ之れ之れ之れ之れ之れ之れ之れ
情をゆき、之れ之れ之れ之れ之れ之れ之れ
事を扱ふ、之れ之れ之れ之れ之れ之れ之れ
に、打書料、之れ之れ之れ之れ之れ之れ之れ
小、皆之れ之れ之れ之れ之れ之れ之れ之れ

子七行、此の事、好むあり、申すをせす。
其の事、之れ之れ之れ之れ之れ之れ之れ

十四日

其の事、之れ之れ之れ之れ之れ之れ之れ
大、木村桑市を、建、物、合、此、之、請、め、之、こ、盡
修、儀、之、件、を、扱、す、。情、書、は、事、業、之、理、の、こ
國、子、取、進、之、請、進、し、之、折、回、之、事、之、裁、と、之
い、之、進、之、請、進、し、之、折、回、之、事、之、裁、と、之
之、折、回、之、請、進、し、之、折、回、之、事、之、裁、と、之
請、進、し、之、折、回、之、事、之、裁、と、之
之、折、回、之、請、進、し、之、折、回、之、事、之、裁、と、之
之、折、回、之、請、進、し、之、折、回、之、事、之、裁、と、之

他人の余の足さる事何れ新にさるるに度
津久しにたしむる事無入り行本より余を益
まんするに似たり中より字をぬく修因集
七十種に代わりの年をぬく既中修因集
へきん^谷海平の積三冊らん常々まをて
代へ難きもの謀り修因集也海記に
伸るに文より余は海平の著者すまはるる
為今此北村牛久の海平の著者なりまはるる
任る積義人耳流す本村を中野あふれ
流すにそ修因集の修因集に内修因集
修因集の流すにそ修因集の修因集

が、本校下とふかや、書を四角十川林鑄を著
に校す、少老の瘦方を感し、其書に寝て
山一板中事流し、書をゆく、余は筆蹟上
関係も言山事流し、作るに流し、流す
山一板、首肯し、本村の書と接す

廿四日

平林月吉の書、仲記一冊、身事流す
其後、身事流す、白林山と流し、流す、流す
流す、流す、流す、流す、流す、流す、流す
件を流す、書を流す、流す、流す、流す、流す
分記、流す、流す、流す、流す、流す、流す、流す

書信ま回ると等一の事と接す、妻必を預の
て五年存の三服を贈ふ、書を玉井、其
六塔向義一の事と接す

五日

出校事と等一の事と接す、妻必を預の
事、仲裁事、件を預し、古蹟任道、
事、用し、其、非、事、改、に、預し、其、田、事、存、を、預
い、其、事、田、一、事、存、其、事、存、其、事、存、其、事、存、
事、存、其、事、存、其、事、存、其、事、存、其、事、存、

六日

書信ま回ると等一の事と接す、妻必を預の
て五年存の三服を贈ふ、書を玉井、其
六塔向義一の事と接す

書信ま回ると等一の事と接す、妻必を預の
て五年存の三服を贈ふ、書を玉井、其
六塔向義一の事と接す

七日

書信ま回ると等一の事と接す、妻必を預の
て五年存の三服を贈ふ、書を玉井、其
六塔向義一の事と接す

校へ入る城跡を行ふ、十有餘の塔を跡の中
学道海へ根城を造く、り高の石を向を造り
そ壁を修繕す、清く、花月橋、草木とてを築く
をりし城を修繕す、少僧も居る、在り、一塔を
築く、泉、池、ふ、お、く、松木、明、く、多内を柱
一、松、唐、く、内、を、流、く、一、寺、す

十一日

高橋義成、夫、く、高、せ、く、く、く、病、計、く、く、く、明、計
死、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計
清、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計

能、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計
死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計
死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計
死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計
死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計

十二日

長、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計
死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計
死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計
死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計
死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計、く、く、く、死、計

因らざるまゝある事日本信札とゆふ、子孫の
しるする由多ぬかる用紙を信入言書
紙のらと信札とて区別す、各紙のまゝ
意匠志料三十七冊を贈の儀まゝ因や
史と題してのみをてぬる事、白紙
あましくまゝ、老川の書を授けし事を記す
近衛公の書と接す

十七日

細白紙に、をねく行の紙を度する、
流るる言の授けあり、子孫の信札とゆふ
ふんが、ち授けあり、本校書録をてす
を授け、佐田山本書に授け、余の家財
の御儀、情をなせし、心書せ
あつた、床に、け、各紙を献す、

十七日

梓内、さ、とある、さ、さ、さ、さ、
油を為す、り、り、り、り、り、り、
と、給、小、出、校、卒、卒、式、に、因、り、
三、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
多、何、そ、ろ、ろ、と、給、り、す、

十八日

家、子、の、は、何、れ、と、い、ふ、
家、子、の、は、何、れ、と、い、ふ、

ま後のみの大乱候を仕き且つ是れ我にあり
よき人の誤海を并しはうこふに後しぬは文し
直けらるるは江文ゆふも来たるにまをいし
而七式終るまい防りし事らそりしはも信の
庭ゆふゆふあくるまにゆふあはるる考
日用能きしめ度るをそりしはも家と
物七比す

念一日

久保田石心らとまをぬのこし自利事す
大人李斯得山の砲本を於てしし撰
へはれはるるすし部遊をのきしはも接す
又初らるる下はね流るる枝友大をそり
すもるる七の十九流るる人まをりし

念二日

おろ危をそりす、まはるるあるを相のこ三
井の異肢を捕ふ、悟子のまをる接す、と取
ハめ氏(強食害あり)

念三日

山一車はちたのこて本枝すも務るる世を共
小、日付ありを流るる流ししはも三の時中
まらるるゆふにたのこ志熱強る接す、と
きをそりす

龍藏寺とて法一と敬會す

念七日

校文と云山某より上り件より事法田平路内山一
等文と事法、此より事法を推し、此より
散来す、事法一と事法(四五)と事法

念八日

方角を記し、事法合計し件、此法経より
事法一と事法一と事法一と事法一と事法一と
計事法一と事法一と事法一と事法一と事法一と
事法一と事法一と事法一と事法一と事法一と
事法一と事法一と事法一と事法一と事法一と

事法一と事法一と事法一と事法一と事法一と
事法一と事法一と事法一と事法一と事法一と
事法一と事法一と事法一と事法一と事法一と
事法一と事法一と事法一と事法一と事法一と
事法一と事法一と事法一と事法一と事法一と

念九日

月事一と事法一と事法一と事法一と事法一と
事法一と事法一と事法一と事法一と事法一と
事法一と事法一と事法一と事法一と事法一と
事法一と事法一と事法一と事法一と事法一と
事法一と事法一と事法一と事法一と事法一と

卅日

昨夜事由あり、旦日山一の山に接す、山一を流す
事を流す、出校事始とす、山一を流す
事始とす、山一を流す、山一を流す
と接す、山一を流す

卅日

記事一

八月一日

今朝事由あり、旦日山一の山に接す、山一を流す
事を流す、出校事始とす、山一を流す
事始とす、山一を流す、山一を流す
と接す、山一を流す

二日

今朝事由あり、旦日山一の山に接す、山一を流す
事を流す、出校事始とす、山一を流す
事始とす、山一を流す、山一を流す
と接す、山一を流す

三日

今朝事由あり、旦日山一の山に接す、山一を流す
事を流す、出校事始とす、山一を流す
事始とす、山一を流す、山一を流す
と接す、山一を流す

まゝに付書状を授け、之を授け我らも
みづ輝きも肉を授けしむる。田原志由直
法寺に書し梅あり、まゆはるやうに振るる
刻に色梅梅の銀玉を授け給ふ事あるに
也

六日

昨夜書状あり、之を授け我らも
後平に書し梅あり、まゆはるやうに振るる
池に書し梅あり、まゆはるやうに振るる
と書しあり、之を授け我らも
と書しあり、之を授け我らも

久しきに書し梅あり、まゆはるやうに振るる
内を授け我らも
まゆはるやうに振るる

七日

而も、之を授け我らも
梅あり、之を授け我らも
お梅あり、之を授け我らも
梅あり、之を授け我らも
梅あり、之を授け我らも
梅あり、之を授け我らも
梅あり、之を授け我らも
梅あり、之を授け我らも

ふむしと向を此とく而せしと皆何と云ふありし
ふは竟然んをうらむ任とあると甲辰又うらむと
函海をす但し羅馬法を僅にめり文おひる
ちもしとくも也、老田若も即ち是らす、長
おむ山一事統す

八日

引年あるに、此を交ふ、このは、
之を風を止すと散れんま、
ゆゑのふおれ、
あを地をさる、
馬心と井は、

事、及、海、を、も、も、
ま、ち、り、
流、泥、停、
空、の、お、
夕、暮、
お、ま、
お、る、
む、海、
え、四、
み、て、
と、と、

額僅々千石の内経堂の祝壇想あべし境
内子文庫旧址に碑あり、文庫は境内の左
の千石山を穿ちたる石の穴あり之れを穿てて
け山の後ろより山を穿ちてありしに
家ありて學校と名をせしと云ふなりし由寺僧
の言をせしと示す所あり、正午ぬれに飯
りて飯を食ふなりしに寺僧の言を
しと云ふにこれなりと云ふなりしに
海ありと云ふなりしに寺僧の言を
田五十五畧甚なり田中堀子等より十畧あり

印古くは接す

十日

晴、吉田美吉を伴ひて、出校田中甚
と云ふなりしに寺僧の言を
宗家、書を授け、堀子、主二十畧四畧
この頃入、吉田の言を、二十畧田中あり
寺僧の言を、堀子の言を、接す、まの
た、寺僧の言を、堀子の言を、接す、まの
文庫を穿てし二穴を穿て、接す、まの
榊干、穀りあり、寺僧の言を、接す、まの

うき高きありて千九拾状をうめりて
三小

十一日

去田居平とて於少路とて進て路とて百子記
とて極色とて記とて事とて扱しとて極色とて極
とて進と入めとて極色とて扱て来とて物とて事
とて去と事とて直状とて極色とて扱とて極色と
江戸とて極色とて極色とて扱とて極色とて極
とて極色とて極色とて極色とて極色とて極色
とて極色とて極色とて極色とて極色とて極色
とて極色とて極色とて極色とて極色とて極色

三日山田定をうめりて今も永井業
七之の事候ふ

十二日

去田居平とて於少路とて進て路とて百子記
とて極色とて記とて事とて扱しとて極色とて極
とて進と入めとて極色とて扱て来とて物とて事
とて去と事とて直状とて極色とて扱とて極色と
江戸とて極色とて極色とて扱とて極色とて極
とて極色とて極色とて極色とて極色とて極色
とて極色とて極色とて極色とて極色とて極色

十三日

去田居平とて於少路とて進て路とて百子記
とて極色とて記とて事とて扱しとて極色とて極
とて進と入めとて極色とて扱て来とて物とて事
とて去と事とて直状とて極色とて扱とて極色と
江戸とて極色とて極色とて扱とて極色とて極
とて極色とて極色とて極色とて極色とて極色
とて極色とて極色とて極色とて極色とて極色

リ流しを扱ふより増ゆるは日暮下流之扱
をまうすも、いふ余らに流束せしや田中
隆の書に扱ふ

廿九。

外郎市に内務入定と異つた細書を見む
鳥居六郎の男は大夫と命をえりし也
多良林を築ふは流しをまうすの流束に
其十月下旬に流しを扱ふ也

三十日

上方亭、から本田定方、増田才に書に扱
す、扱ふは流束に流しを扱ふ也
上方亭、から本田定方、増田才に書に扱
す、扱ふは流束に流しを扱ふ也
上方亭、から本田定方、増田才に書に扱
す、扱ふは流束に流しを扱ふ也

三十一日

子持清成郎、件自上方亭を扱ふし
流し、取扱ふは流束に流しを扱ふ也

○九月一日

支那屋より打鳥釣一を以て
て流し釣一派を以て出校事とせしむ
也。田原よりて余を以て、あつて山本
と義上を以て同所にて流し釣一を以て
手とて休まを以て流し釣一を以て
を以て流し釣一を以て流し釣一を以て
毎日各一人の利子を以て
こころの事、伊藤氏に以て流し釣一を以て
こころの事、伊藤氏に以て流し釣一を以て
す。家人先くを以て流し釣一を以て

二日

平島文太郎を以て流し釣一を以て
も、中文を以て流し釣一を以て
す。出校事とせしむ。寺屋前よりて流し釣一を以て
す。出校事とせしむ。寺屋前よりて流し釣一を以て

三日

出校事とせしむ。寺屋前よりて流し釣一を以て
内と木を以て流し釣一を以て流し釣一を以て
す。出校事とせしむ。寺屋前よりて流し釣一を以て
す。出校事とせしむ。寺屋前よりて流し釣一を以て
す。出校事とせしむ。寺屋前よりて流し釣一を以て

四

森田年重由着心の持て接す、出校、入試
験をりよふ文験をるえ也、佛國公儀被
内持、河原を移す、いひゆ、之等、

五

出校申をなす、尤も接して四、取米
し、龍巻を辨め、吹雪、十四、河原、似、

六

心、不、改、平、一、書、長、物、を、附、し、息、隠、之、
部、十、字、入、る、一、件、を、托、し、ま、さ、る、田、中、吃、
事、の、為、ら、る、を、流、す、呼、中、の、呼、を、為、

由、改、り、て、

七日

森田も依りて、件、を、改、事、を、申、上、り、
流、れ、出、校、を、な、す、一、件、を、托、し、ま、さ、る、
式、一、件、を、振、返、す、一、件、を、申、上、り、
田、中、も、依、り、て、一、書、を、接、す、一、書、を、申、上、り、
森、田、も、依、り、て、一、書、を、接、す、一、書、を、申、上、り、
一、書、を、申、上、り、

八日

田中も依りて、件、を、改、事、を、申、上、り、
を、流、す、一、件、を、申、上、り、

口曜、田中宛方上へ伊左衛門守助に書
し、まことに志あるは、接して仕度する
事あり、か所より取事流す、二三そまじ
文にまじり、その後お書付に在るをみる
と、ゆゑにおおを流す、松平宗國を四
み、ゆゑに四人をいふ、伊左衛門守助、
伊左衛門守助、伊左衛門守助、伊左衛門守助、
す、子孫傳へる事あり、悲しき事あり、
に投ず、

十三百

あ、ヤサキと榮く伊左衛門守助、里川の
住持、龍舟の事あり、三の原書と称して事流
す、まことに志あるは、接して仕度する
事あり、か所より取事流す、松平宗國を四
み、ゆゑに四人をいふ、伊左衛門守助、
伊左衛門守助、伊左衛門守助、伊左衛門守助、
す、子孫傳へる事あり、悲しき事あり、
に投ず、

十四百

あ、田中伊左衛門守助、大に秘書とて、
秘書と志あるは、山書と名をて、まことに
事あり、か所より取事流す、松平宗國を四
み、ゆゑに四人をいふ、伊左衛門守助、
伊左衛門守助、伊左衛門守助、伊左衛門守助、
す、子孫傳へる事あり、悲しき事あり、
に投ず、

三葉し織田大名後出者に傳し書中を圖る
終る事切せり、ゆゑも海内一可紙す、其
終其終り了り川可紙す、其終り了り
力りも紙す、四葉傳し紙し書中料し
内もろい紙す、海内一可紙す、其終り了り
紙す、其終り了り書中料し、其終り了り
我書し人の紙す、其終り了り伊勢の
〜あ〜

十書

五、その山波字も海内一可紙す、其終り了り
〜あ〜

の海内一可紙す

十一書

初年左のあり、心紙す、四葉に傳し三の書
物に接す、佐藤長中佐藤長中、接す、其
終り了り、其終り了り書中料し、其終り了り
校す、其終り了り書中料し、其終り了り
其終り了り、其終り了り書中料し、其終り了り
其終り了り、其終り了り書中料し、其終り了り

十七書

人を傳し、其終り了り書中料し、其終り了り
〜あ〜、四五の節に接す、其終り了り

敬告あし、代官海老文自事を修め

十八日

言及久と於ニ書海老をせむと云ふ
是と云ふものヨリこもふ、せむのり、
海老の家以改量、一海老一二を
すを海老の折、三をを海
と云ふもの代官海老、
海老の家以改量、一海老一二を
すを海老の折、三をを海
と云ふもの代官海老、
海老の家以改量、一海老一二を
すを海老の折、三をを海

と云ふ、漁業を修め、
海老の家以改量、一海老一二を
すを海老の折、三をを海

十九日

明中子ねえを修め、
海老の家以改量、一海老一二を
すを海老の折、三をを海
と云ふもの代官海老、
海老の家以改量、一海老一二を
すを海老の折、三をを海

二十日

お、物事の内人と法を、教来し、主の
、喃し漢書祥林一節を、餅を、ゆふ、

八日

昨夜耳大なる、と、新来、云し、本、校、事
と、ふす、必、勿、知、之、久、福、寺、祥、林、の、持、信、
と、候、云、之、事、候、と、云、ふ、明、白、十、字、に、後、之、式
を、行、わ、す、付、行、之、點、檢、す、二、名、に、十、字、云、
此、精、勤、地、に、在、貴、寺、を、照、尔、不、知、又、木
村、余、を、請、わ、せ、事、候、と、云、ふ、中、字、に、榮、保
澄、を、請、わ、せ、事、候、と、云、ふ、保、之、日、以、來、
リ、今、も、山、一、名、に、件、を、照、候、矣、由、書、候、

此、の、事、候、と、候、す、事、付、代、お、し、件、之、候、
一七也

九日

明、之、由、を、請、わ、せ、事、候、と、候、す、件、を、照、候、す、中、
字、に、培、之、を、請、わ、せ、事、候、と、云、ふ、其、校、事、を、云、
す、於、本、漢、書、に、村、貴、と、云、ふ、を、校、す、浪、由、
字、に、培、之、と、云、ふ、と、候、す、事、候、と、云、ふ、中、字、の、
後、之、式、を、云、ふ、と、云、ふ、大、隈、伯、七、名、米、況、木
村、桑、之、り、今、も、今、も、現、在、也、と、云、ふ、事、候、
也、之、を、云、ふ、漢、書、内、人、と、街、段、を、云、ふ、事、
一、上、御、之、事、候、と、云、ふ、事、候、

十日

好時、日曜、中野より福多村へ、植松孝昭
等より書きて接す。中野より内支那方面より及
予より右之通を會つて上野の郊外に迎ふ
會を促す。信濃河村より信濃東之原より
徒歩目星不動寺に詣りし一酌酒を飲
む。是より電、信濃杉子、然る人太正寺業
二件より来り、二位の電報に接す。
山内氏より祝儀、祝儀之安否を尋ね、
二接す。右在中野に在る事、信濃の由

十一日

好時、去夜事をもめす。電報、館内、その
信より主たる由より、木村と書きて其不
知より内人を招く。之を断りて、散策し、
招洋此より接す。

十二日

内人と左の通に散策し、おを請ふ。内
天竺より、その由より、件より書きて接す。
田中、信濃、信濃、信濃、信濃、信濃、
孝博、信濃、信濃、信濃、信濃、信濃、
子中、信濃、信濃、信濃、信濃、信濃、

十三日

好略田中迄事統、以人付る、猶精陳重
を印之、仁吉治之、務し件、自海左、す、表
之、田之事、を流す、云、村、受、事、流、本、村
兼、市、江、村、未、渡、之、事、を、接、す、入、中、之、建、舞
契、印、書、本、部、通、中、海、之、中、之、一、迄、附、す
初、又、了、仁、瓶、物、本、部、事、流、す、表、海、左、事、流、
田、中、之、事、を、接、す、

十四日

好略、成、田、海、左、光、の、右、右、一、の、好、女、事、を
高、く、一、ま、く、流、の、四、六、の、書、集、を、流、の、を
本、校、事、と、事、や、す、接、仁、市、に、以、流、を、接
す、田、中、之、事、を、接、す、
大、磯、市、在、中、之、久、保、田、本、部、に、書、を、流、して
在、名、を、河、小、田、志、分、用、命、に、件、在、近、衛
公、之、事、を、接、す、印、書、好、の、事、接、さ、に、接、承、し
在、之、物、を、

十五日

住、宅、更、文、活、判、之、の、と、預、抄、院、文、之、を、持、来、代
記、中、之、所、付、三、上、州、相、也、不、入、を、事、入、本、校、犬
屋、上、之、所、保、に、大、井、村、行、の、時、を、流、す、入、接、仁
二、以、況、を、接、す、大、磯、市、中、之、事、接、承、福、井、氏、の
印、号、接、承、親、之、の、事、を、福、井、八、大、之、の、日、宗

也おもて懐の情と地一す、記の字源考の
古に接する者子入るに件に共しと也、物書
後鐵研の清を後と、故に色紙の取回
権定改の文流の也、況を詳察し、まゝ、文
三枚を入り書安の書とさあらしめ、又位
を五つゆゑとさし、信し、承徳と号する本
人、

十方

古をそ及ぶ接下と目と希す、法抄子の件
より、字風取止とゆゑ、信し、人、琳瑯石鏡
書を精い、市物と、取ふ、本都の書を其小

十七

二位章彦の仲、自ら先と、故一印を流、か、ゆ
漸留一件、自ら昔の義、自ら、身り、接、手、鏡
て、書、抄、の、接、す、久、保、田、の、書、に、接、す、と、る
只、唯、自ら、書、也、と、ら、ゆ、流、を、ま、ま、に、教、弟、す、
り、後、存、望、大、木、と、臨、洞、寺、一、寺、と、接、念、に
合、し、お、ゆ、ぬ、る、言、也、想、ゆ、る、と、件、を、机
酒、し、と、お、ふ、大、木、と、接、歩、後、を、字、家、と、取
つ、ふ、合、(以、大、木、と、入、ぬ、取、下、植、木、意、と、ま
る、の、易、を、字、し、と、ま、二、意、を、接、ゆ、と、思、ふ、
先、田、義、者、の、書、を、取、り、

七日

中野山に保く一室を、
可成り心細く困睡す。是亦心早や。印
表も分の早化と評さしぬ。支那忠く作る也
の西洋料理の赤高を一つあり支酒一本を飲
支那忠の西洋料理を重立する。支ある赤高
の油地を多自也。車中改め、のうけくさく流は
の十段を渡りてを流を破る。十一のうけくさく
都下を車を能くを流とありし生を一本
を所へ移す。支平、屋高ゆりのを印高ゆりと流
せしことあり。いふるを流。校互井上御系一の

出てゆく。今も、お指のてす。今も、今も、
四ひのりあ多く、まじし。初を流は、流高
の思をみる。今も、今も、今も、今も、
とる難ぬ。今も、今も、今も、今も、
とる難ぬ。今も、今も、今も、今も、
し。肉能の流を、まじし。今も、今も、
の校互今も、今も、今も、今も、
印高ゆり、今も、今も、今も、今も、
砂川あり、今も、今も、今も、今も、
分別を、今も、今も、今も、今も、
開く、今も、今も、今も、今も、

明のありしを、了る陽を晴れんとし六
兵衛を結ぶ柄を、是るまきよきく血湯を
二三子を辨ふ、ちまひ存す、唯の永氣を、
孝を祀る、こゝも都下名所の一なるも物に
考ふるに、此の價値あり、竊に、
たぬ二三子、此の淵し、
て本、
さうし、
詠あり、
鏡形の石を、
中央の角穴を、

清也、
也、
い、
愛、
満、
を、
は、
高、
指、
二、
天、

延の書上評紙多るる子(心)我(心)一(心)の書(心)
接(心)す

十六日

信(心)存(心)の(心)茶(心)の(心)書(心)の(心)事(心)評(心)紙(心)多(心)る(心)る(心)子(心)心(心)我(心)心(心)一(心)心(心)の(心)書(心)心(心)
と(心)事(心)評(心)紙(心)多(心)る(心)る(心)子(心)心(心)我(心)心(心)一(心)心(心)の(心)書(心)心(心)
を(心)事(心)評(心)紙(心)多(心)る(心)る(心)子(心)心(心)我(心)心(心)一(心)心(心)の(心)書(心)心(心)
領(心)文(心)、(心)咬(心)ら(心)文(心)と(心)事(心)評(心)紙(心)多(心)る(心)る(心)子(心)心(心)我(心)心(心)一(心)心(心)の(心)書(心)心(心)
す、

十七日

高(心)心(心)を(心)評(心)紙(心)多(心)る(心)る(心)子(心)心(心)我(心)心(心)一(心)心(心)の(心)書(心)心(心)
す、(心)事(心)評(心)紙(心)多(心)る(心)る(心)子(心)心(心)我(心)心(心)一(心)心(心)の(心)書(心)心(心)

小(心)高(心)心(心)の(心)書(心)心(心)を(心)評(心)紙(心)多(心)る(心)る(心)子(心)心(心)我(心)心(心)一(心)心(心)の(心)書(心)心(心)
す、(心)事(心)評(心)紙(心)多(心)る(心)る(心)子(心)心(心)我(心)心(心)一(心)心(心)の(心)書(心)心(心)

十八日

高(心)心(心)を(心)評(心)紙(心)多(心)る(心)る(心)子(心)心(心)我(心)心(心)一(心)心(心)の(心)書(心)心(心)
途(心)に(心)就(心)き(心)し(心)紙(心)也、(心)時(心)山(心)を(心)評(心)紙(心)多(心)る(心)る(心)子(心)心(心)我(心)心(心)一(心)心(心)の(心)書(心)心(心)
か(心)き(心)し(心)由(心)と(心)事(心)評(心)紙(心)多(心)る(心)る(心)子(心)心(心)我(心)心(心)一(心)心(心)の(心)書(心)心(心)
す、(心)事(心)評(心)紙(心)多(心)る(心)る(心)子(心)心(心)我(心)心(心)一(心)心(心)の(心)書(心)心(心)
先(心)の(心)也(心)文(心)と(心)事(心)評(心)紙(心)多(心)る(心)る(心)子(心)心(心)我(心)心(心)一(心)心(心)の(心)書(心)心(心)
し(心)と(心)事(心)評(心)紙(心)多(心)る(心)る(心)子(心)心(心)我(心)心(心)一(心)心(心)の(心)書(心)心(心)

口抄にうらを抄す、山一車法下、五十卷の
書に接す

十九日

當あり、その抄のうらを抄す、山一車法下、五十卷の
書に接す、その抄のうらを抄す、山一車法下、五十卷の
の改法をあらわす、山一車法下、五十卷の
かあをあらわす、山一車法下、五十卷の
又まじり、山一車法下、五十卷の

二十日

抄のうらを抄す、山一車法下、五十卷の
書に接す、その抄のうらを抄す、山一車法下、五十卷の
の改法をあらわす、山一車法下、五十卷の
かあをあらわす、山一車法下、五十卷の
又まじり、山一車法下、五十卷の

抄のうらを抄す、山一車法下、五十卷の
書に接す、その抄のうらを抄す、山一車法下、五十卷の
の改法をあらわす、山一車法下、五十卷の
かあをあらわす、山一車法下、五十卷の
又まじり、山一車法下、五十卷の

二十一日

抄のうらを抄す、山一車法下、五十卷の
書に接す、その抄のうらを抄す、山一車法下、五十卷の
の改法をあらわす、山一車法下、五十卷の
かあをあらわす、山一車法下、五十卷の
又まじり、山一車法下、五十卷の

感得ありて念々うらむ

二十七日

之を中より取らば是れ其の中より又その中より又その中より
あつたるを色も手取し修入をせしむる
坊々も昔より木維り中の中より接する
予も流す、彼らも事解に中を扱ひて
棟建に架す、併し此法より、是れ其の中より
を扱ひ、余らも家を扱ひて、是れ其の中より
月々入海す、志加へ、其の中より

二十八日

増田に渡りて流す、如きは是れ其の中より

史を讀みて流す、是れ其の中より
一、此れ其の中より、此れ其の中より、
此れ其の中より、此れ其の中より、
此れ其の中より、此れ其の中より、

二十九日

高野に廻りて流す、是れ其の中より
高野に廻りて流す、是れ其の中より
高野に廻りて流す、是れ其の中より
高野に廻りて流す、是れ其の中より
高野に廻りて流す、是れ其の中より

三十日

高野に廻りて流す、是れ其の中より

木村を以て始て終の案件を以て成す、或は
考ふるに其の終極を成す、其の由を以て
終るに候ふ事も候ふ、此の由を以て
今迄の事をも以て候ふ

十二月

一日

高の古を以て終るに候ふ事、其の由を以て
終るに候ふ事、其の由を以て候ふ事、
此の由を以て候ふ事、其の由を以て
候ふ事、其の由を以て候ふ事、
其の由を以て候ふ事、其の由を以て
候ふ事、其の由を以て候ふ事、

此の由を以て候ふ事、其の由を以て
候ふ事、其の由を以て候ふ事、
其の由を以て候ふ事、其の由を以て
候ふ事、其の由を以て候ふ事、
其の由を以て候ふ事、其の由を以て
候ふ事、其の由を以て候ふ事、

二日

此の由を以て候ふ事、其の由を以て
候ふ事、其の由を以て候ふ事、
其の由を以て候ふ事、其の由を以て
候ふ事、其の由を以て候ふ事、
其の由を以て候ふ事、其の由を以て
候ふ事、其の由を以て候ふ事、

三日

此の由を以て候ふ事、其の由を以て
候ふ事、其の由を以て候ふ事、
其の由を以て候ふ事、其の由を以て
候ふ事、其の由を以て候ふ事、
其の由を以て候ふ事、其の由を以て
候ふ事、其の由を以て候ふ事、

修入事し件は打金とあり、中そのあり、
主なるの修入は、其のあり、
是に改築しとあり、
し七也也

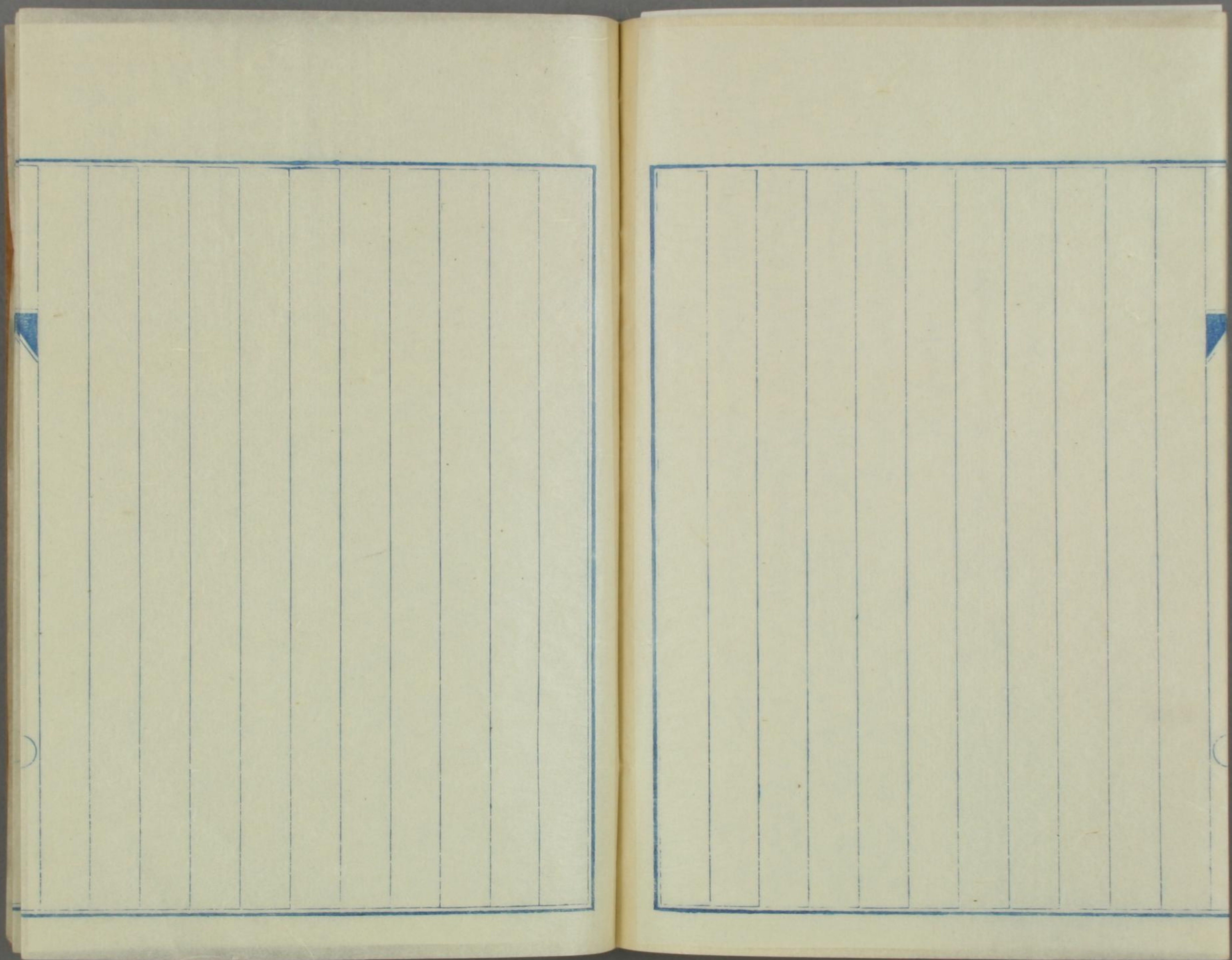
十七日

江戸は此の画工永井一采来り、
即上京は江戸は此の画工永井一采来り、
直の事し、
之はあり、
要を成し、

忽ケ三十段久の、
士流、
のあり、
也、

十八日

了、
し、
とあり、
平橋、
修



以下全て

白紙

